No. 884

'70 にっぽん

南北にのびる四つの小さな島とそれに付随する群島、日本は天然の地下資源こそ恵まれていないが、美しい自然を与えられた。山紫水明と賞賛された日本、紫に映じた山々では小鳥たちがさえずり、山間の清流には若アユがピチピチと跳ねた。風に揺れる木々はともすれば、あたりの静寂を破り、せせらぎは川面の生物たちを驚ろかしたが、そこは万物の楽園であった。人間は自からの生活の場を自からの手で作りあげた。

四季折々に美しい姿を見せた山をはげ山に、楽しくそして悲しい人々の歴史を刻んで流れ続けた豊かな川を泥れた川に、格好の生活の場であり憩いの場であった海を死の海にと。作り変えられた生活環境からいつしか鳥や魚の姿が見えなくなった。……それはあたかも人類全べての未来を象徴しているかのようでもあった。

戦後四半世紀過ぎた今日、日本は再び〝世界の中の日本〟にまでのしあがってきた。万博はその日本の未来に一つの指針を投げかけた。6千万という多数の入場者を記録したにもかかわらず、万博のテーマ〝進歩と調和〟が〝辛抱と長蛇〟と皮肉られる程までに。〝大国〟の好きな日本は、経済ばかりでなく公害でも大の〝大国〟になった。プロ野球を覆った〝黒い雨〟ならぬ黒いスモッグが大都市を覆い尽してしまった。

工場からはき出される排煙と車の排気ガスは大気を著しく汚染し、ゼンソクに泣く患者を多数生んだ。

また現代文明の足ともてはやされた、自動車は、オキシダント中毒や鉛中毒という新しい公害を発生し、戦後最高の交通事故都市交通のマヒ等も加え〝反自動車ムード〟まで出てきた。限りなく積く巨大なビルの建設、そして同時に限りなく積く破壊は大阪のガス爆発事故だけでなく、庶民の身近な問題（日照権等）まで引き起し、都市再開発のあり方に大きな疑問を抱かせた。

狂気社会とも言われる現代社会。そこでは狂気が狂気でなくなるのだろうか。世界的な作家・三島由紀夫の防衛庁での割腹、日本で初めてといわれるハイジャック、続いてシージャックと想像できないことが次々と起こる。

価値大系の崩壊した現代。大人は若者を「理解できない」といい、若者は大人を「古い」と言う。スピードとフィーリングを求めて『今』という瞬時を最高に生きようとする若者。

彼らが歌い、踊る時、ひとつの新しい生命が誕生し、ひとつの古い生命が消えていく。彼らが恋を語る時、一人の老姿が犬に語りかける。人々が海外旅行に目を奪われる時、沖縄がよみがえり、人々が政治に目を向けた時、6月23日は過ぎていた。

競馬ブームと言われた1970年のにっぽん。「走れ走れコウタロー……」のメロデーが師走の街に流れる。人々は歓喜して、あるいは落涙して、あるいは無表情に馬の疾走を見つめる。だがその目に映っているのはただの幻影であるように見えるのは何故だろうか。